

## 東京大学史料編纂所蔵『台記』仁平三年冬記

藤原重雄  
尾上陽介

○書誌

平安時代末期の左大臣、藤原頼長(一一二〇～五六)の日記『台記』の古写本。一卷。縦三〇・〇×全長一九八〇・八糎で、全四三紙からなる。天地各一本の界線があり、界高は二五・四糎。記事の所々に朱筆による首書・合点が施されている。鎌倉時代写。

三条家旧蔵で、一九五一年に東京大学史料編纂所が購入。一九五七年、重要文化財に指定された。架蔵番号S〇〇七三ノ四。

内容は仁平三年(一一五三)十月十八日条途中より年末の閏十二月二十九日条までの日次記。破損により冒頭部分が欠けているが、記事に「立法成寺塔心柱事」とあり、『兵範記』を参照すると十月十八日条であることが判明する。現存する近世の写本類には同期間の日次記が含まれていないようであり、『史料大観』・『増補史料大成』などの刊本に未収録であるが、ほとんど毎日の記事が残されている。ごく一部については、同書に翻刻されている『台記別記』(春日詣記。十一月二十六日条で「別記詣春日事」とあるものと考えられる)・『宇槐記抄』と重なる日条がある。この写本は下部が大きく破損しているため意味の取りにくい箇所が多いが、並行する『本朝世紀』・『兵範記』に見えない内容も多く含まれている。

主だった記事では、五節(十一月十八日・十九日条)、仁和寺御室覚法法親王の病状と薨去(十一月十七日・十二月六日条以下)などがあり、息男兼長の権中納言任官と奏慶について(閏十二月二十三日・二十七日条)は特に詳しい。また、法成寺八講における論議について詳細に記録しているが(十二月一日条)、この頃頼長は熱心に因明を研究していた。頼長の因明注釈書である『左府抄』(『大日本仏教全書』所収)には、十月二十日と二十二日に興福寺僧惠暁と因明について問答したことが見えるが、それぞれ記事と対応している。また、後に因明の師となる藏俊との出会いも記されている(十一月六日条)。

末尾には、頼長息男の兼長・師長の上日(出勤日)がみえ、勤務内容までを具体的に記録しているのは珍しい。久安三年(一一四七)六月十七日、藏人所別当となった頼長は上日奏上の励行を藏人に命じ、この仁平三年九月、師長に続いて兼長も参議となった際には、二人の息男に対して長幼や好悪に関係なく専ら上日の多少によって推挙すると誠めている(刊本所収九月十七日条)。翌久寿元年記の末尾にも同様に兼長・師長の上日が記録されており、昇進において出勤状況を重視する頼長の強い意志が感じられる。

その他、詳しくは別途刊行が予定されている影印叢書に譲る。

○凡例

一、翻刻の体裁は原本の改行に従い、概ね現在通用の字体に改めた。  
一、朱書は『』で括り、破損により文字が判読できない箇所は、□あるいは「」とした。残画により文字が推定できる場合は、その文字を□の中に入れた。

一、抹消された文字は左傍にを付し、判読不能の場合は■とした。

一、書き改められた文字は左傍に・を付し、元の文字が判読できる場合には(×)として掲げた。

一、改めるべき文字や、前後の文章から推測できる文字は、「」で括り、該当する箇所の傍らに付した。

一、人名等には、註記を( )で括り、原則として月の初出の箇所の傍らに付した。

一、紙継目は、「紙面の終わりに」を付して示し、紙数は各紙の最初の行の行頭に(1)(2)のように掲げた。

一、校訂の際、『台記別記』による箇所には略符◎を、『宇槐記抄』(前田育徳会尊経閣文庫所蔵本写真帳へ架番号六一七三/六九)による箇所には略符①を付した。これらにより原本の欠損が補える文字は「」で括り、略符を付して該当箇所に挿入した。

〔付記〕

原稿の電子入力には、磐下徹氏の御助力を得た。

〔表紙題箋〕  
『台記』 仁平三年冬

○前欠、仁平三年十月十八日条ナリ

(1)間、範家来日、僧□□

仍日時可勘改、又□□

行件事乎、又御□

上御可定申御呪□□  
〔藤原、頼長男〕

師長昇殿事 師長參□  
〔藤原、頼長男〕

昇殿之由、兩人並立殿□

了着殿上、次着陣座、民部□  
〔藤原宗輔〕

畢、  
〔藤原宗輔〕

兼長未報畢初度可  
〔藤原宗輔〕

忘仏事仍不書□、民部□

云々、師長書了使□□  
〔藤原〕

打鐘示、中納言忠基□  
〔藤原〕

參上、御殿出居左中將降長□  
〔藤原、頼長男〕

右少将行通朝臣不仰御願□  
〔藤原〕

後、威儀師来日、南殿僧綱已□  
〔公之〕

之、依可許仰御殿□□

儀師了、御殿公卿六人□

別当前権僧正隆覚已辞□

尋範依病灸治、明後□權少僧□□  
〔都〕

了退出、今日院鳥羽御堂□□  
〔参〕

院司上達部衣余会云々、

〔別記〕  
〔藤原忠実、頼長男〕

(2)禅閣被仰可行氏寺事、

初參法成寺事、  
立法成寺塔心柱事、

十九日、甲戌、

〔後通皇蓋着袴事〕

亥刻俊通息童法師、着袴、兼園

合、余給扇、見於閑所着兜物、次園

宅宴飲、大内記遠明持來兼

大内記白樹一領、史生亦丈

侍所司隆長不給内記祿

〔左大弁依疾後無官別當獻大供〕

廿日、乙亥、入夜左大弁

二通、須勅使并副他文獻之而去

職事佐今日、御前論義權少僧都

〔季御誡經竟事〕

廿一日、丙子、申刻直衣伴隆

次參内、於宿廬束帶、此間

兼長・師長參候、令打鐘

余・兼長仰候御殿

朝臣・右少將公光朝臣在南

故也、事了着陣、令申

文了着參議座了歸

廿二日、丁丑、惠曉來談、自明深更參島羽

所、

(3) 廿三日、戊寅、申刻參上、須叟退下、

宿所、即入御宇治、依院圍

廿四日、己卯、午刻參御所、即

〔皇后宮春季御誡終事〕

廿五日、庚辰、終日甚雨、今日皇

〔安樂〕  
〔奉院御八講僧名定事〕  
客亭、令親降朝臣衣

〔承保〕  
二年定文、長者初度、為例文、

二十八口、不書其數、仍今日

了返給、親隆取之退下、

勘文、秉燭參皇后宮、上達

外今夜宿候、欲日次宜

〔安力〕  
〔法成寺帶啓、文權等事〕

申刻差家司敦任、遣法成

〔經〕  
先見帶回録、萬壽五年四月八日、次見帶、次見器

之暮明日返納、

〔巡力〕  
〔法成寺、東北院事〕  
廿六日、辛巳、申刻白參法成寺、

阿弥陀堂、次東塔、次葉師堂、

堂、次講堂、次觀音堂、次新東北院、次

出北、法勝寺參入、

〔内殿五節定文事〕  
雖無此事、依禪閣仰

〔珍〕  
維摩會興福寺堅者願起、精義

五節定文、

起、精義已講惠珍、東大寺、參会、

義時、一三三短冊也、一者法園

(4) 其後精義、問答引、声如常、余交詞一者、

有法、引声、堅者文

明才智不足、依維摩

〔持參明年維摩講師請事〕

廿七日、壬午、申刻已後

〔宮番論議事〕

摩講師也、十八日、加朝臣返歸、

義、一番皇覺已講山、濟瑜已講、

□番、今夜宿候、

一番皇覺大法師答、

二番濟瑜大法師問、

三番守覺大法師問、

四番行惠大法師答、

五番融真大法師答、

仁平三年〔千月廿七日〕

〔兼長着座事儀〕

今日兼長着座、十月余大納言早

檳榔、直衣冠、前駢衣冠

衣、垂袴、帶釵、在車後、次親陰陽朝臣覽日時

朝臣加賀茂見了造元子日時下給行事家司

木工寮左大史師令造元子、大臣御子

西宮抄御床子、敷黃端半帖、又大臣御子下敷、

(5) 仰着座日時親隆留置

東三条中門廊南妻、中門於中反閉陰陽

給祿、憑親取自東門乘車、於待賢門時申々時、下

浅沓出門、着深沓、依雨令前駢取笠、先着

北頭西腋納言、着靴、依雨西頭

戸着戸着座、在母屋西須〔座〕起

自外記西門經西廂中間、入北面西戸着

入小屋着深沓、隨身一人召、自本路出門、至陽明門

乘車帰東三条、官掌、召使、前駢、对南廂

座在西一間北頭、高麗客座東

主人塗高坏二本、殿上人

官掌、召使以下着饗、賜祿

史無祿、〔身〕隨且不来、主人改着直衣、着饗

裝束、明日、明後日殿上人直衣、役大夫衣冠、

守有成朝臣、役藏人五位殿上人役不經

鑿鈿釵、有文帶、慶賀隨身褐衣冠、垂袴、盃

已上、左中将成雅朝臣以下前駢、束帶今

以下饗政所、明日饗播磨、明後日饗出羽、

廿八日、癸未、々刻宮御読経結願、余、〔藤原實能〕内府

在座、事了参法勝寺、依大乘会結願也、

(6) 達部四人、仍召加四位四人、〔隆長〕秉燭之後、事

廿九日、甲申、山階别当前權僧正入来、談

卅日、乙酉、已刻参鳥羽、先於東殿五壇法結願、

仏葉師法結願、阿闍梨大僧正行玄蒙賞、以

任權少僧都、無闕、信慶辭職、以弟

之後、余謁座主、〔行志〕賀賞事之後参内、於直廬朝服着陣

季仁王会事、〔藤原〕参議為通執筆、此間範家

下範家、以仰違覺、々長等事、且仰範家、〔藤原朝隆〕頭石大

下年分度者文、即返下了、深更事了退出、

今夜文章博士不参、明日可来里亭之由、〔外〕記伝

参内之間、依為路便向東三条、謁兼長日、

十一月小建

〔兼長着座之後初着政五通并公家御衰日〕

一日、丙戌、晴、今日兼長着座後、初着政

而至于公家御衰日者、非可忌之事

信公延喜九年五月廿二日丙戌着座、同十五

戌着座、此兩日五墓、着座猶無忌、何覽初着

自東三条參外記、三人、伝聞、高陽院使

繪沃懸地銀、件銀先年神閣給余、自高陽院給、為名不失先

日例也、而今度無件勘文、大失也、已二箇參外記着

此間兼長禮座、余頃之召使申時、已即開外記門北扉

而出立之間、父子相對、非無其憚、仍侍從

納言公能、參議師長參着、次着序、先申

(7) 次請印、少納言成隆朝臣、了隨侍從所、出

奉盤大舍人奉納言、參議盤了、史申文儀如去五

執効奏、史退掃之後、置笏立箸例也、今申文之後、不執効物立箸、大失也、成隆朝臣有奇氣也、次居汗湯

右大弁立箸之後、羞汁物之間、起座退出、食了飲湯、酒

參内、陽明門、出立如常、着左仗、余及而長皆用敷政門代、自外記參

外記申御曆奏候由、使藏人弁範家、可

所之由帰来、仰聞食由、召外記仰此由了、自

出上御門、兼長、今日文章博士茂明朝臣来、仰祝願事、

取出法成寺宝藏物見兼事、土御招内府、宰相中将

二日、丁亥、取出法成寺宝藏物、門、招内府、宰相中将

依日暮翌日返納、以家司敦任衣冠、令出納之、

深更自院以御書被仰明日可參之由、

三日、戊子、午刻參鳥羽、路間降雨、頃之止、申刻心召候

外簀子、他御不、檢非違使左衛門尉季實、散位重成、

應召、下北面人九人、右衛門尉為程、同維繁、同盛弘、左

内舍人仲清、於御前射五度、維繁中九、時成中八、盛弘

時成、中七、六、已下不記之、

四日、己丑、未刻自宿所參、上使俊憲奏五節、春日詣事、了

宿所、即參宇治、

五日、庚寅、兼祐來談因明、其義甚深、

禪閣依御忌日渡御小河御堂、余依春日祭以前不參、

六日、辛卯、藏俊為尋範僧都使持來瑜伽論、其次談

九日、甲午、今晚藏俊婦南京、晚頭余婦洛、

十日、乙未、發遣春日神馬、乘尻使右馬助盛業、戰事、外記申

十二日、丁酉、為遣梅宮神馬、乘尻使雜色藤行盛晚頭參

俊憲奏曰、來月七日可詣春日之由奏了、而來月忌月

參神社、仍今月廿六日可詣者、仰曰、殿上人等可改催者

宿所、

十三日、戊戌、未刻參上、須叟余及大納言公教卿心召參御

下北面人於御前射十度、

季實、二、的、的、七、

重成、的、的、六、的、的、三、

實繁、的、的、三、的、的、六、

源、的、的、四、的、的、八、

為經、的、的、三、的、的、四、

盛弘、的、的、三、的、的、五、

惟繁、的、的、十、的、的、九、

叙時、空、空、無、的、的、三、

維則、空、的、的、四、的、的、四、

時成、的、的、五、的、的、六、



布衣役送、自殿上南戸被置、兼弘已下皆候院者也、先日奏請、有  
勅差遣也、此外有大將隨身相交代之、其番長着冠、

從主人故、六位於簀子伝取、二献、三献、二献内府受之、〔右〕  
也、〔近日府生〕 汁等皆如此、〔左〕 授余、左少将

实長朝臣勸盃、藏人藤高佐執瓶、次居汁、大臣已下、〔参〕  
議已上、殿上五位<sup>〔長〕</sup>、六位役送、頭已下六位直居之、〔参〕

次朗詠、公能脚、次三献、〔余受之、授内府、〕 頭弁朝隆朝臣勸盃、藏人  
高階泰経執瓶、余強令飲三四盃、又令朗詠、袒裼、次余

已下袒裼、次今様、〔左兵衛在美国、〕 次乱舞、〔上達部、〕 次殿上人向  
五節所、西宮抄云、寅・卯日間、自殿上可然、五節所召着

物云々、若扱此文、似不献飯・汁・酒、同抄勸物云、近代調、  
飯出之、〔或本無、此勸物、〕 旧定文皆々殿上扱飯、仍今度飯・酒・汁

皆献之、〔其酒用、〕 黑飯盛合子受居之、〔朝台、〕 但小台盤上  
盛土器、次余参上着座、使朝隆朝臣召諸卿、内府已下

参上、次童女二人、〔左少将公義朝臣、左中将隆長朝臣付前童、〕 下仕四  
人、〔前少納言俊通、右兵衛佐信賴、右衛門佐信隆、〕 参上如常、頃之退、〔口、〕

〔12〕次公卿自下薦退下、〔日未沈、西山、〕 今日垂母屋御簾、卷廂御  
簾、公卿内座在廂、童女候廂、付童女之人候簀子、去々

年垂廂御簾、公卿座在簀子、童女且候簀子、失也、  
次余退出土御門、童女下仕令見女房、兼長自内退出

東三条、朝服参神祇官、依為小忌、宰相也、今日隆長  
不着殿上、故実付童女三人、不着殿上在五節所云々、

頭弁昨日直衣、〔出衣、〕 今日衣冠不出衣、若先例歟、今日隆長  
紫浮文織物指貫、紅梅浮文織物出衣、〔不入袖、有中、〕 兼長

紫浮文織物指貫、出紅打衣、今日童装束二具、昨日  
統子内親王給之、御使佐渡守為清来土御門、〔余、内之、左、〕

〔13〕中将成雅朝臣取禄女裝束、給之、下仕裝束二具、太相〔口〕  
昨日送之、二具内府今日送之、余帰家之後、高陽院賜

童、御使俊通、禄物在東三条、追送俊通家、  
〔豊明院會事〕

十九日、甲辰、戌刻参内、奉仕内弁、無失誤、大歌別当民部卿  
宗輔卿不参、以左衛門督重通卿〔中納言、〕 為代、小忌上中納言

忠雅卿不参、参議兼長卿〔口〕空薫、御酒勸使参議  
師長、大歌別当召参議雅通、宣命使雅通、禄所師長、

余不預舞姫拜、向陣見宣命・見参、就射場奏之、昇  
殿賜参議了、不預宣命拜退出、今夜大納言公能脚已下

参入、上依御物忌不出御、仍懸御簾、殿上人乱舞如常、  
〔兼長小忌裝束色自事〕

〔13〕兼長裝束青摺黑半臂、打下襲、豎文、〔須用、表、〕 表、  
紅裏、裏濃紅梅柏三領、濃打衣、濃单衣、紅大口、日圍、

着冠、赤釵、〔着小忌右肩舞人着座、〕 有文玉帶、魚袋、鈔釵、紺  
依袒裼也、

地平緒、未刻兼長着小忌、向太相府・内府〔已上、〕 統子内親王  
家、童女、賀童女下仕裝束事、是先例也、太相公授手

〔於兼長五節所有勸盃酌事〕  
本云々、節会之間、於五節所有盃酌、左兵衛督忠雅卿

調送肴物、一献左中将成雅朝臣、二献参議師長卿、三  
献左衛門督重通卿、二献後、大納言公教卿歌催馬楽、彼

卿自五節所帰来、密語余曰、雖不知先例、歌安名尊・  
刺櫛者也、余曰、先歌衰山、但刺櫛尤有其興歟、舞姫

退下之後、五節退出東三条、同参入儀、其後舞姫〔退〕  
分散、兼長自内帰東三条、殿上人参皇〔后〕宮歌遊〔口〕

今日高陽院・皇后宮御院、童女下仕昨日所付之殿上人  
付之、但信頼・信隆不参、

舞姫裝束、參夜皇宮〔后服力〕、寅日參議教長、今日參議師長、

御前試夜、今夜皆隆長、交殿上人亂舞、五節參入、退出之

間、令主殿官人秉燭、不申院及大將隨身、今年右大臣

能登〔藤原基家〕、伯耆〔宇觀能〕、皆晚參〔女王祿事〕、不獻童女、

廿日、乙巳、師長參入、行女王祿云々、入夜左中將成雅朝臣來、

密語曰、去夜節會了、權大納言公教卿居仗座、招成雅〔源雅定〕

申殿下曰、近日左大將獻辭狀之由、有其〔源雅定〕聞、皇后宮權大夫

夙夜院中、若權大夫無所望者、定當其仁、願權大夫勿有

所望、若許所申於殿下、永存君臣義、不敢乖命、此度

拜任一年之後、將辭退以授權大夫、答曰、所請懇切、雖須

命、以有二理不敢許之、余執權柄、法皇殊恩、法皇即世、

必為非人世之所推、余之所知、非今度者兼長〔兼長〕、倫望、此

理一也、余所庶幾、法皇坐時以二子付左右將、是以內府

右大將〔兼長〕、若辭大將讓公能卿、必可懇申彼卿、至親信不可

避覽是下乎、此理〔兼長〕也、

廿一日、丙午、菓棚奉所々、晚頭向東三条、入夜有調樂事、

無神樂、其後於對南庭〔廟〕舞之、雖非先例、因見練習否

也、其舞未練、不能終曲、次婦土御門、今日童女一人、下仕

三人依召奉統子內親王家、隆長朝臣、実定伴之、童女

一人、下仕三人称有所勞不令參、依客報劣也、

使參議兼長問法親王疾、婦來曰、進入臥內面謁、其疾

來曰進入甚重、

廿二日、丁未、弘暎高陽院渡御宇治、為見春日詣也、使朝隆

朝臣奏春日詣賞〔注一〕、紙、及昏藏人藤憲、定來曰、明

後日臨時祭、今日可有御馬御覽、而次將皆申障不參者、

即令參隆長、入夜民部卿來、問春日詣問上達部禮儀、明

日吉田祭、明後日已後春日詣潔齋、仍令〔出〕與寬敏俱

文、右大弁朝隆朝臣、右少弁資長候之、此間兼長着納〔藤原〕

與、非參議大弁着參議座之時、參議着納言座也、〔非違使〕

之前、示大弁令見文也、申文了頭朝隆朝臣下檢〔非違使〕

公俊辭右衛門尉之狀、即下外記、依失明辭〔所職云々〕次朝隆仰曰、

尉紀久信、依兄久忠別功賞讓犯人〔鳥羽〕、任右衛門尉者、即

召折堺、硯等、令參議兼長書之、不成草、參議後初執筆〔鳥羽〕

故也、書了持來、執筆之間無一失、召箇盛之、使外記內覽、

于時〔鳥羽〕歸來之後、進射場付朝隆奏之、返給還座、召

外記問兵部省候否、外記申候由、仰曰、召之、其後外記

三度申兵省候由、每度仰曰、召之、須加初度之度申之、而除

無其說、次丞參進、先提余、余召曰、參來、丞就軾、余給召

名、丞還立本所、余仰曰、罷給、丞退出、其後余、余使外

記撤筥、硯了退出、先是問大外記師業曰、除目必任三人

已上、然者公卿給二人可加任歟、答曰、依別功賞被任之時、

先例或付一人者、仍今夜久信之外無任人、

廿三日、戊申、依例發遣日吉、々田神馬乘尻等、日吉使家司

忠行、吉田使左近將監源國賢、日吉乘尻着響、吉田乘尻未着

藏人所之処、明日臨時祭乘尻、日吉乘尻着響、吉田乘尻未着

之間、余出押座事行、々忠申一曰、早〔忠行力〕出御時、運渡饗膳於

社頭着之、非無先例、仰曰、〔吉田〕吉田祭上卿師長、

廿四日、己酉、渡東三条拵定神馬、舞人馬、今〔日吉〕日吉使家司〔在傍アリ〕

參、三長參入、々夜或人來曰、納言已上不參、為〔神祭〕



召左兵衛督中納言忠雅之由、後聞、督卿參入云々、隆長取□

不取重蓋、御襖之間出御、有御拜、其後不出御云々、□□

減歟、後日問頭弁之処、答曰、不奉見御出入□□俄難□

減否、還御、神樂兼長參入、師長・隆長不參、

給舞人・陪從・乘尻等裝束事  
廿五日、庚戌、給舞人・陪從・乘尻等裝束、入夜□

成雅朝臣息童加元服事  
車・走馬等、今夕成雅朝臣息童加元服、□

秋季仁王会、而依春日詣延引、是法皇仰□□、

春日詣事 別記  
廿六日、辛亥、別記詣春日事、

競馬事 別記  
廿七日、壬子、今度春日競馬者、果去年三月以□□

之願也、彼時願曰、此病平癒、當具競馬上番參詣

別記 競馬事、

廿八日、癸丑、別記帰京事、

廿九日、甲寅、晴、未刻伴兼長參御堂、入自□□法成寺□□

自南廊西面階、自廊柱内西屯□□足九

弘廂、于時無人、仍暫入休所、令催□

參議師長卿參入、即着弘廂□□

盃、居折敷余取之勸大納言、流巡及□

着仏前座、余著長者□□

五个日皆次僧侶法印如此、次僧侶有親下□□

(17)昇自東階、正面、入自正南面南間□□

講師法橋・誦師凡僧中定之、北方座不列衆僧次講讀□

高座、次打磬、堂童子着座、左右□

花籃、次散花了対場、□

縁赴、無表白次説経、次□

師下札盤復座、祝願法有親□

信円自北方進出、就行香机□

円南、大納言宗輔・參議兼長□

人三人經座前列居余南、西面□

信円北、進立每屋北第三柱東□

舍人助藤仲頼取火舍在其末、次□

已下行香、仲頼受香、先是僧綱已講出立座東端、講師同之信円□

余已下列立其西、東上北面、仲頼在□

前北進就行香机、奉余□□

輪於信円、仲頼自殿上人座末行□

余已下自下臈復座、自座前後之、余自座上復之□

起座、經南廂向仏後、講読師不口、公卿・殿上人亦同

復座、夕座儀同朝座、但問者三□

僧侶起座、經南廂、自後戸退出、大納言已下先起座□

(18)降本階、經本路揖讓大納言、□□

不用之、後日敢此、他人且同次行事清職持□

初後中日僧綱用納、已講已下、講讀□

日大臣束帶、立義日、衣冠大納言已下□

備膳於南弘廂、初日朝座・中回□

列、先例依有式日不催上達□

催廻藤原道長本願末葉月卿雲客、上□□清職持□

宗朝臣為使、依旧例殿上人不參、而近年依禪閣仰參人、

今年亦所參人之、今日補極樂寺及觀音堂別當□□□□行

寺事之後初補之、招頭弁之処、余參御堂□□

仍用吉日也、後召頭弁、付最仁申極樂寺別當□□

家、土御暫在客亭、待頭須叟頭來下之、余隨回、頭弁□□

曰、申ノ任（余唯称、卷文、朝隆退去、召右少弁資長下之、資長結申、余仰曰、申ノ任、資長称唯、卷文退出、次官符未到之間、且）

可執行寺務之由、令親隆成長者宣、遣最（最仁者故）

大史師經（不期）五位、之処、申無所見之由、仍令（最仁者故）

遣權少僧都教仁房、（藤原忠教等、在母喪卅九日之内）

依例自今日不用魚類、於成樂院始修懺法令備後、誦

弥陀百万遍、

十二月

一日、乙卯、晴、未刻御堂、入自西面中門、（參服九）

具後始行朝座、（今日以後不）着座、（園）

(19) 先是令使兼長問仁和寺法親王疾、兼長自仁和寺帰出、御

門着朝服參入也、（藤原、賴長男、讀聲起）語曰、進入臥内面謁、見其氣色、似有

減氣、問者三人、（慶有、寬教、千榮、夕座問者一人、已講、重覺、講読師）

降高座之間及暗、（藤原、退依立義也）于時大納言宗輔卿、

參議資信朝臣參入、次立義、探題權少僧都慧曉、

問者已講惠珍、（精義、東大寺、立者得業仲覺、興福寺、所立仏）

立義四種相違義、

章云、余二身公隨諸如来所化、有憎有無不無云々、心何

有法自相相違作法如何、一、章云、如盧沙仏令釈迦

菩薩超九却等云々、心何、疏云、量因服等無能受用

云々、能受用鉢何物耶、二、章引花嚴経云、有妙浄土

出過三易第十地菩薩当生其中云々、心何、疏云、因且

不遍、乍似唯能有於実句之無実故云々、心何、三、章

引対法輪云、以所生処不可忠誠、唯仏所覚云々、余

他受用公歟、非候故恩園因歟、無義因歟、四、自

輕身如来居何土耶、料々（元）非云々、如何、五一問

依余命、五重至于内明者、非所知因明精義難之

中、有所漏之時余驚之、又立者（分九）不詳精義之時

具宣其意、精義不詳答多之時、余具

精義者問、所立謂立謂宗法謂能別立文

曰、有性非実之言、顯宗之謂有性

法謂能別、是所謂惣宗能別

(20) 曰、不可有惣宗能別立義云々、今園

燈抄所説也、立者所申似失、彼抄

其由欲棄惣宗能別之義、立者

美、又精義者曰、據別有鉢之量与

量無相違、何彼正此邪、（彼據別有鉢之量、此有性非実之義）

曰、相違者皆因過也、故云、欲令學者知因

過故云々、余未達此義、不能弁是非、又

有法因相能違他共、立者答曰、無比量

惣後令且惣難云々、精義難曰、是疏王也、非之義

故鑑冒、今謂法師此意言有仮叙如是云々、立者

会曰、以同為仮叙答非仮叙、精義重難曰、見

要始終問答、皆為仮何扁同哉云々、今案所

理、今夜精義、立者言詞分明、才智（猶）浅、一問

鉢立者存神我之義、（見明、燈抄、問者曰、存神我義者）

是前余後少歟、即難之、又曰、若非前余後少已下

文相順云々、今案、对不存前余後少義之立者同付

前余後少歟、難之可謂嗚呼、三問目亦不遍、立

存三量參差兩俱不成之義、問者、精義者不知

義不能加難、精義難曰、有無実之因広有法

有一美之因、忽可有此難云々、今案、難有不賞不<sup>□</sup>立者所申也、可嘲可咲、探題代精義者難曰、非美之一宗

有法有性唯美之上、有性者有無美之因、始終似唯  
有美句也、無美何云乍似乎、又非美之一宗有<sup>□</sup>法

(21) 有性者美德業三句之上有性也、答云、言上有性者可遠

疏云々、不出疏文、余出文曰、有性<sup>□</sup>法是美德業<sup>□</sup>有性  
乃至為一宗已非德非業、後二宗法有法同前云々、如此文者

非美之一宗有法有性三句之上有性也、余又難曰、非美之  
一宗有法有性唯美上有性者、非美之一宗可有寬因

狹宗而兩俱不成不可涉二量、其故何之疏問云、何故

不言有於無美二美多美云々、此問詞云、問不用無美因二  
美多美因用有一美因之故也、然非德之宗有德故因、

非業之宗有業故因、猶在不失非德非業兩宗不可用有

無美之因也、立者不能令此等難五問了、立者退下、探題

已下退出、次余退出、于時丑刻、立義作法具去年記、仍不委  
記、

二日、丙辰、午刻伴兼長參御堂、先着南弘廂座、于時未備  
膳、可謂懈怠、公卿着仏前、之後、備膳云々、先是僧廿口許參集、即着仏

前、鐘聲止、僧侶自南廂着座、先是僧侶、左在稱、余着座之間起、座向後戶、上邊部、殿上人着座

之後更參着、不引(藤原)此後大納言宗能、參議師長參入、朝座問  
者三人、權律師實珍、已講、訖僧侶經南廂出自後戶、此間打鐘、五個日替

座、次唄、此間堂童子分花筥、次散花、其作法異常、散  
花師於仏前唱散花一遍、訖師助、音如常了唱讚際出正面間

自實子南行、衆僧從之、上達部、殿上人起座、自實子  
(22) 南引入、自南廂東面殿上人西行之間、諸大夫取袈裟立南

面戶外、先是開、授上達部、諸司官人於後戶、新已下右邊三  
迎、先新、次親、次奉、次公卿、次殿上人、次家司職事、單、以南廂、西廂、北廂、東實子為路、堂童子不勤、薪、籠、桶置

東廂正面間、行香机東、通机體之、公卿乍持袈裟復座、置袈裟於  
座前々、敷、殿上人、家司職事、跪實子、西置袈裟、經殿上

人座末、自實子北行、置正面間長押端、次對揚、堂童子  
納花筥退了、次說經論義、問者法橋覺長、尹真、此座、問者一人例也、而日未及昏、仍二人、事訖僧

侶經南廂、自後戶退出、大納言已下降立、次余退出、于時日、其  
儀同初日、薪持右衛門尉紀遠宣、籠持右兵衛尉藤清業、桶持  
同源滿明、此中滿明遲參、藏、(符号)意(依)改(入)「催促」、移刻參入、仍召籠

家中、四日、免之、今日朝座之前、於南弘廂可有盃酌、而依饗膳  
遲備無此事、聽衆証明遲參、夕參了、仍令候御堂、亥  
刻許免之、

旧例御堂末葉上達部、殿上人(藤原通長)雖源氏、土御門右丞相子孫入御  
堂末葉、彼右府為字治(德力)

子放及長者之家司職事、諸司勞五位參袈裟、大臣大袈裟、  
並白色人別一帖、但、而年來長者之外、或奉凡絹、或奉代物、令因  
迴仰可進袈裟之由、仍皆奉也、諸司勞五位、猶奉代物、惣四十三帖、

右大臣以隨身被奉之、内府亦被奉袈裟、雖無其理、芳意之至也、散所雜色奉榊枝之支  
華枝、依用袈裟付此枝也、

自御堂伴而長兼、參内、着陣、召大外記師業、(中惠)位、仰可  
奉公卿分配例文、硯之内六位外記二人奉之、令參議兼長

書之、重服、依先例、入之、但不入神事、訖以師業内覽、以藏人源長定奏聞、返  
給下外記、了退出、

(23) 三日、丁丑、午刻許衣冠伴兼長參新院、依召參御前、未刻參

御堂、朝座問者三人、實安・教長、此間參議師長・雅通參入、夕  
座問者三人、宗延・源忠、事訖祿及膳、次立義、探題法印弁竟、  
延曆立者弁竟、同、問者一已講濟瑜、二阿闍梨公頭、三問

守覺、四問証朝、五融覺、注記行珍、已上圖二問了退出、先日  
所定二問永澄、三問公頭、四問守覺、而証朝望申問者、仍探  
題參上之間改之、以本二短冊為四短冊、故公顯・守覺顯

不相違、一問依余命五重、

〔御幸御八講結願〕

四日、戊午、夕刻率師長參法成寺、着弘廂、須叟中納言

參入、家司有成朝臣奉盃、原折余取之勸盃忠雅、藤原忠雅

及殿上人、次立箸、即拔之、着仏前座、僧侶言

者三人、立基此間大納言宗輔・宗能、參議言

僧侶引列參上、此間有誦經、誦誦文教事家司

那信円持參之、又有經供養事、觀隆朝臣加判經一部言

例也、揚題名了小綱來取之、問者一人寬

六人之外、親隆朝臣・公保朝臣立之、火舍取言

座之後、僧侶、調聲阿闍梨字千孫先例執口

訖殿上人・諸大夫引布施、此次引袈裟也、殿上人

不引布施、禮禮之上達部了僧侶經南廂、自後戸退出、口

立、次余退出、于時日未沈西山、緇素皆口

重三十、年來未見如此布施、供養口

成刻許召立者覺談因明、律師覺珍口

座、兼円・覺長不能交詞、覺珍独歩、

今日兼長・隆長參宇治、晚頭高陽院還御口

〔高陽院自宇治還御事〕  
〔藤原泰子、額長師〕  
〔藤原泰子、額長師〕

咩祭、直講賴業誦祭文、有閏月云々、口

六日、庚申、辰刻雷鳴、已刻許成隆朝臣口

日来得滅、自昨日重苦困危、只今參向者口

〔仁和寺法親王大滅事〕

辰刻成隆還來云、以申刻於木寺南園口

其面西向、年六十二、寬治五年十二月廿九日

〔兼長將法皇密許、即給法皇手〕

悲歎尤甚、依異父可有十日假、卅日口

〔法親王薨事〕

八日、壬戌、今夜葬法親王於嵯峨野辺云々、口

懸骨向高野云々、後日成隆朝臣語曰、中納言

步行、從葬車後、信法親王依遺言不從口

修之、遷地之所無修善根、且是實言口

喪、穢中、而去六日親王入滅之後、參入口

〔信西法師預神崎庄、是法皇之殊〕

從車後時、人曰、兼賢孝心、雖闕忠節、尤口

傳聞、信西法師預神崎庄、是法皇之殊口

十日、甲子、入夜雷雨、權律師千覺表衣

宇治、次來此亭、余謁之、鳥帽召大外口

王薨奏之由、此次師業密語曰、右大臣口

法皇不許之、其後再三請之、近日有恩口

右大臣十九日出家、余不信受之間、今聞此說口

十一日、乙丑、使俊憲奏雜事於法皇、入夜口

兼長將法皇密許、即給法皇手口

開白稱有三位任大將之例、舉申、口

〔兼長將法皇密許事〕  
〔藤原忠通、額長兄〕  
〔藤原忠通、額長兄〕  
〔兼長將法皇密許事〕  
〔藤原忠通、額長兄〕  
〔藤原忠通、額長兄〕

修諷誦於同房修之、調布五十端、諷誦〔自名〕

失也、此房雖無仏事、送高野者可〔失也〕

十四日、戊辰、早日參成樂院、已刻齋〔刻〕

刻禪閣渡御、兼長參入、講說了禪閣〔禪閣、彌長參、彌長參、彌長參〕

兼長婦京、今日自筆經法師品也、諷誦〔失也〕

失也、

十六日、庚午、月食依雨不見、伝聞、公家〔家分延曆寺被行千僧御誦經事、月食御祈〕

御誦經、為消月食災也、左中將成雅〔誦〕

十七日、辛未、伝聞、師長依為無憚之日〔參〕

向木寺南房、弔親王喪、〔依弔喪、不參內、中宮宮婦、藤原聖子〕

十八日、壬申、未刻婦京、出法親王飯文、〔法〕

着除同服、

殿上

請飯十箇日

右、依異父兄喪所請如件、〔莫法親主〕

仁平三年十二月十八日從一位行〔賴長、覺法親王母源師子齋子〕

外記

請飯十箇日

牒、依異父兄喪所請如件、以牒、

仁平三年十一月十八日從一位〔若大臣出家依法皇不許延引事〕

或曰、右大臣出家依法皇不許、延〔延〕

今日禪閣參鳥羽、明後日可〔外記政事〕

十九日、癸酉、依政兼長參外記、〔親王薨後、初朝臣參也、藤原〕

婦來曰、南所物忌、少納言教宗不称唯、

藪又着外記之時、於小屋戸外着深〔藪〕

今日散位資隆、奉禪閣仰書〔藤原〕

一枚、加白紙一枚、皆書封、散位仲頼〔藤原〕

置宝前、先令申祝、次權別当最勝取〔石清水宝前取字在大司所望之名事〕

々々婦參鳥羽獻禪閣、披闥之処、既得公經〔字位〕

後聞、最勝取殘之二、於宝前燒之云々、

自今夜十三个夜參彼堂、〔以中閏月、一日晚參〕

廿日、甲戌、自今日至于廿三日、与藏俊〔荷前定〕

廿二日、丙子、今日荷前定、上卿民部卿、執筆參議兼〔藤原〕

資長来、内覽、

廿三日、兼長為法親王於木寺南房修諷〔誦〕

廿四日、戊寅、辰時夢、余參内、頭弁日、公〔藤原朝隆、藤原朝隆〕

余問曰、公教本既大納言、何重任〔藤原朝隆、藤原朝隆〕

大納言訛也、今任是實也、

今夜美福門院藏人一藪左近將〔美福、藤原朝隆〕

人所射、明朝終命云々、今日〔藤原朝隆、藤原朝隆〕

持來論義記注一卷、近代不進〔之九、命所持來〕

廿六日、庚辰、兼長及德法師〔兼長、藤原朝隆〕

今日内府注庄領十五个所〔内府注庄領於女房事〕

彼親王被讓女房、然而年〔藤原實能〕

廿八日、壬午、終日甚雨、伝聞、早旦〔藤原實能〕

付德法師於尋範僧都、兼長〔長〕

夫前駝、僧侶亦前駝、入夜參〔衣、皆布、僧侶亦前駝、入夜參〕

供奉白妙幣、依奉幣衣冠、次參與福〔自余前駝布衣、次參與福〕

福寺五師相意入滅、其替今日補〔寺〕

別当意信持、有官別当、近代無得業五〔別当意信持、有官別当、近代無得業五〕

停任之後未補之、

因茲、融真雖無其望補之、入夜□□□□  
〔定御堂修正行事〕  
行事、今日余衰日、親隆朝臣執筆、□□

初遣下文於内府、被注渡之庄々、  
〔大臣八幡詣依雨延引〕  
今日右大臣可詣八幡之由風聞、而□□  
〔依雨力〕

廿九日、癸未、晴、禪閣伴德法師還御宇、  
〔德法師候御車〕  
昨日辰刻出御宇治、  
〔兼長・師長・隆長〕

伏拝乗車、至法華寺辺居更騎馬、□□  
所僧都在堂方、德法師着布衣、□□  
長及殿上人・諸大夫追隨僧都、□□  
〔流力〕

次帰參禪閣御所、  
〔德法師三幣殿懸籠〕  
〔德法師〕  
〔長後之幣殿懸籠〕  
外、先奉金銀幣、三長及□□  
〔德法師〕

拜、其幣直付社司、次有御經供□□  
次參御若宮、奉幣儀如前、次參御□□  
先參御金堂、有御諷誦事、  
〔權師賞〕  
御經供養事、  
〔不空稱索經十卷、以講玄緣為導師、於力〕  
次還御□□

依仰留寺、与僧都同車、  
〔禪定院大夫日、〕  
後、德法師宿僧都居処、師国朝臣、  
〔源〕  
今日巳刻許、三長向僧都居処、迎□□  
〔御力〕

從參御所、被奉弘法大師手跡、  
〔空徳〕  
〔經、梵網〕  
〔28〕午刻許出御、及日没着御宇治、三長留宇治、  
閏十二月

一日、乙酉、内侍所御神楽云々、依御物忌不□□  
〔藤原・賴長男〕  
三日、丁亥、兼長・隆長自宇治帰京、  
〔藤原忠実、賴長男〕  
四日、戊子、禪閣參鳥羽云々、

〔燒亡奏〕  
巳刻冷泉西洞院燒亡、未刻檢非違使左衛門尉□□  
已下率來、列立中門外、職事皇后宮少進雅亮□□  
〔源〕  
謁之、光保申燒亡之趣、  
〔稱失火、是例也〕  
見參官人等、  
〔其〕  
雅亮來出居依申、  
〔光保同了退帰、仰光保〕  
官人等退出、近年絶無燒亡奏、別当公能□□  
〔藤原〕  
等不承引、去比別当大怒、召籠官人等於庁底□□  
今日有此奏云々、別当所行可謂賢矣、  
〔文初〕有藏人方言書・陣申文等

〔除輕服後初朝參〕  
六日、庚寅、除輕服後初朝參、申刻□□  
於直廬令申吉書、  
〔藤原〕  
〔右大弁・右少弁〕  
有申文事、  
〔藤原朝臣・家司盛徳・侍中無〕  
兼長執筆、此間頭弁下吉書、  
〔朝隆〕  
〔右大弁・右少弁〕  
〔左〕  
〔平〕  
〔文下〕  
〔先使餐餐申可被免内覽之由〕  
〔於關白、坐裏有依請之救命〕  
〔藤原忠通、賴長兄〕  
〔院御仏名〕  
〔於北殿、依未渡御北殿、參禪閣〕  
〔日來御〕  
〔棧敷殿〕  
即余參入御仏名、如常□□  
〔朝殿行幸定〕  
定朝觀行幸雜事、余説例文、中納言公能□□  
〔藤原〕  
信輔朝臣奏之、名謁之後、退下宿□□  
〔藤原〕  
七日、辛卯、午刻參御所、西刻講説了、□□  
〔發遣河前使事〕  
帶、發遣河前使、  
〔藤原〕  
〔朝臣・長光〕  
〔職事仲〕  
〔高階〕  
用魚類、  
〔後日見長治二年十二月廿一日〕  
〔用也〕  
〔29〕八日、壬辰、弘暎禪閣還御宇治、余□□  
退出、  
〔補仁王會請奏呪願文事〕  
後聞、仁王會檢校中納言重通、參議兼□□  
〔藤原〕  
補闕請、  
〔兼事〕  
上即奏呪願文云々、  
九日、癸巳、降雨、巳刻許竊向南殿、令右衛門尉平盛□□  
〔藤原〕

中三、了帰宿所、申刻参御所、酉刻講説〔仁王金事〕

十日、甲午、未刻兼長参八省、次余伴隆〔長〕

問南殿出居・堂童子参否、及申刻檢校〔長〕

事右少弁資長、自資長自八省参内、次〔長〕

〔補季御説經開講事〕

關請、兼長、召行事右少弁資長下之、次召資長〔兼長〕

申参内、即令打鐘示、中納言忠雅参〔兼長〕

余已下参着殿上、出居着座之後、着〔兼長〕

于時見仏像、如來像也、案圖書寮式〔兼長〕

議、改懸五大力像、朝座了僧侶退下、〔兼長〕

退着殿上、出居退下、余仰左少弁範家、令〔兼長〕

上、次公卿参上、南殿上〔兼長〕

退下、次公卿退下、次出居退下、今日参〔兼長〕

中納言重通・公能・忠雅、参議兼長・師長・為通〔兼長〕

南殿出居左中将隆長朝臣・右少将行通朝臣、〔兼長〕

朝臣・同公保朝臣、次参新院〔兼長〕

次参鳥羽、棧敷〔兼長〕

公教・修理大夫忠能、三〔兼長〕

四位三人、相并八人行香、自余卿〔兼長〕

十一日、乙未、雖在宿廬、依無車不〔兼長〕

若君何比下向哉、報曰、明春可令下〔兼長〕

(30)之後、御暇塞時藏俊〔兼長〕

年高位之輩、至于因明者無如藏〔兼長〕

所中也、昔匡房年未滿三十〔兼長〕

土、治曆三年、依重道也、豈非其例乎、〔兼長〕

十二日、丙申、々刻参御所、入夜退下、〔兼長〕

公家荷前云々、兼長・師長為使、〔兼長〕

千覚律師自南都告送曰、大〔兼長〕

都遷化已了、年六十、余甚傷之、〔兼長〕

夙夜禪門、三十余年來見他門〔兼長〕

〔荷前事〕〔兼長〕

著世尤可哀者也、翌日兼長〔兼長〕

兼長相原、参議師長深草陵、〔兼長〕

参議雅通宇治三所、兼長自内〔兼長〕

給祿於衛士、騎馬發向、右少将〔兼長〕

并二十許人從之、師長自陣〔兼長〕

五六位兩三人之外、無相從者、依〔兼長〕

十三日、丁酉、未刻参棧敷殿、御懺法結願後退下、〔兼長〕

御門、於作道、須叟束帶、伴三長参内、〔兼長〕

檢校上、重通、宰相兼長、着陣、史奉〔兼長〕

事、右少弁資長内覽了奏之、次返給、〔兼長〕

着陣、定御前僧、秋季御、参議兼長執筆書之、〔兼長〕

奏返給、下資長了、余打鐘参上、中納言忠雅〔兼長〕

南殿余・大納言宗輔・中納言重通・参〔兼長〕

威儀師來申曰、南殿無可奉仕御導〔兼長〕

使右少弁資長〔兼長〕

(31)左中将隆長朝臣・右少将笑長朝臣、中殿左中〔兼長〕

右中将光忠朝臣・右少将行通朝臣・左少将公親〔兼長〕

成雅朝臣仰御願趣、事訖参新院、依〔兼長〕

〔兼長〕

十四日、戊戌、依造法成寺塔、違王相〔兼長〕

刻帰、

十五日、己亥、々刻出京、参鳥羽、北殿、依美〔兼長〕

事了退下、休廬、不<sub>浴</sub>

十六日、庚子、今日有武者所射云々、仍自<sub>廬</sub>□

被<sub>止</sub>件射、故不<sub>參</sub>上、且不<sub>帰</sub>浴、依恒例春日神馬<sub>浴</sub>、□<sub>廬</sub>

帶<sub>祓</sub>遙拜、次依例講礼記、講師憲孝、問者頼業、登<sub>宣</sub>

兩人、論義皆是經中大事也、講師所<sub>答</sub>□

卅九日内停止詩宴、

今日季御<sub>誦</sub>經結願、中納言忠基・參議雅通□

兼長・師長・經宗候中殿、納言<sub>已</sub>上行事右少弁□

文云々、又始行円宗寺法華会、先有僧□

兼長書之、定了兩人向寺云々、

十七日、辛丑、未刻參<sub>棧</sub>敷殿、武者所五十六人□

五度、三院<sub>法皇、高陽</sub>、於<sub>棧</sub>敷<sub>覽</sub>之、余・内府・大<sub>納言</sub>

立榻、棧敷南戸内踞<sub>之</sub>見之、酉刻射<sub>退</sub>□

向宇治、

十九日、癸卯、晚頭<sub>歸</sub>京、今日内裏<sub>御</sub>仏名□

參入、隆長在出居座、問上達部云々、出居座有□

襖合・小袖合事云々、事了名謁之時、次將同□

朝隆朝臣問之云々、

今日最勝寺灌頂、上中納言忠雅・參議兼長□

(32) 次相率向寺云々、<sub>御仏名前、有此事</sub>

廿一日、乙巳、今年未被行官奏、先日使頭弁<sub>回</sub>□

処、有可行之仰、仍今日内大臣欲候奏、大臣□

不可有官奏之由被仰云々、疑依御<sub>目</sub>不□、<sub>申刻許民</sub>

部卿來談、入夜頭弁來仰曰、自明日可<sub>留</sub>除目、召仰諸司□

者、召大外記師業・右少弁資長仰之、又仰師業<sub>曰</sub>、明日申<sub>刻</sub>

刻、明後日戌知可被參之由、可告廻諸卿者、

女房日來煩物氣、今夜殊甚、權律師行政□

感悅之余、賜衣一領、<sub>余取之</sub>

廿二日、丙午、巳刻許頭弁來、内覽申文、未刻召<sub>因</sub>外記師業□

賜<sub>視</sub>・筆・墨等、申刻伴兼長參内、先内覽<sub>臣</sub>・中納言忠基□

在座、須叟中納言忠雅參、入夜藏人來、召作<sub>法</sub>如常、今夜□

唯三省史生・公卿未給等所任也、依京官<sub>事</sub>未承仰也、

今夜須有<sub>頭</sub>官<sub>奉</sub>、而納言早出不能令<sub>奉</sub>、子刻許事了、

參皇后宮、依御仏名也、<sub>先是内大夫、兼長</sub>、<sub>參入始行、余雖行</sub>

謁後退出、參除目之公卿、余・内大臣・中<sub>納言</sub>、<sub>忠雅・忠基</sub>

參議兼長・師長・經宗・為通・雅通、今夕<sub>納言</sub>

鳥羽還御、隆長寄高陽院御車□

廿三日、丁未、亥刻頭右大弁朝隆<sub>朝</sub>臣來示任人事、即參内、

作法如常、闕白不參、奏大間之<sub>後</sub>、<sub>報</sub>大間・成文、於殿上授□

清書上卿、<sub>重通</sub>、仰可内覽之<sub>由</sub>、又示免清書内覽之<sub>由</sub>、

依兼長任中納言、余立殿上<sub>翠</sub>角屋下、<sub>依雨濕也</sub>、使頭弁□

朝隆朝臣奏候由、復命後拜<sub>舞</sub>了參院、

奏達、招出檢非違使季実告□、<sub>兼長留内</sub>

奉仕清書了退出、<sub>依減日不</sub>、

(33) 俊通車、退出時遺余車也、<sub>有帷裳、車副一人</sub>

權中納言藤兼長<sub>兼</sub>、參議藤朝隆<sub>兼</sub>、權天文<sub>博士安部泰親、兼</sub>

民部大輔藤教宗、刑部大輔藤俊憲、<sub>右京權大夫源俊良</sub>

大宰權帥藤忠基、藏人頭藤光顯、<sub>檢</sub>非違使平惟繁□

今日除目之一所被下帥清隆卿、右京權大<sub>夫</sub>頭親朝臣<sub>辭</sub>五□

个度、除目不敷閑白座、<sub>失也</sub>、仍硯<sub>篋</sub>推遣<sub>左</sub>方、<sub>座上</sub>、但取大間□

管退下時、推遣右方、<sub>座若推左方、執</sub>筆退後、硯<sub>篋</sub>不可□

連他管故也、大束申文、奏大間之次、加入<sub>其</sub>管返上之、返給□



大間之時、大東留御所、一官申文有二通以上者、〔任人申文〕  
指成文、不任申文入第三覽筥、〔兼長〕兼長〔依家礼不〕  
立射場列、仍不取筥文、

〔兼長任權中納言兼中將〕  
兼長任權中納言、〔兼皇后宮權大〕夫、右近中將、年十七、〔保延〕以延四年生、至今年十六才、〔去〕去月廿四日夢、既有其驗、中納言兼中將者、坂〔上田村麻呂、中〕

藤良相、同基〔經〕昭宣、同定国、同師〔亮〕京極殿、同忠〔亮〕入道殿、  
同忠通、源有仁、藤賴長、同兼長、右近并〔十〕十人也、去比權中〔〕

納言忠基卿曰、去納言任帥、并以息男少納〔亮〕  
所望可足、余以此由申禪閣、々々參院仰〔〕

少將者不許之、去月廿五日忠基卿送書〔〕  
民部大輔哉、余示教長卿曰、先日約有〔〕

時、可止兼長望申任貴下、所以者何〔〕  
心禪閣止兼長望申任之、貴下可任〔〕

可有其怨也、而今以忠基申任帥、其〔〕  
〔34〕所可然、然而欲遺納言名者、今度貴〔亮〕

辭退、其闕任兼長如何、其報狀〔〕  
仰旨畏承了、次第御沙汰凡〔〕

憑候、如此御志更不可忘候、真〔〕  
一端其名大切候、然而便宜候者相博〔〕

棄本官候也、以此旨可然之樣可〔〕  
十二月廿五日 〔〕

同廿六日、以忠基書狀〔去中納言任帥、〕  
同廿七日、自宇治給院御返事、其狀如此、

忠基卿書狀見給了、都督明年任終也、〔〕  
頗不得侍事歟、雖止少將之望、相博轉任申狀、樣々〔〕

于慥不心得侍者也、抑年内中納言其闕可〔〕  
進中納言、以侍從成親可被任少將之由、令〔〕  
雖為刺闕、相博鉢侍者、何事侍哉、〔〕

申了者也、且刺闕之所難有之由、仰〔〕  
坊官賞、任去年美定之例、可被任〔〕  
禮紙、

年内中納言尤大切事と見給者、〔〕  
納言之例、尚為吉例能侍歟、

余申曰、兼長不兼中將、雖遺憾、勸先〔〕  
殿以往皆不兼之、何恨之有乎、〔〕

少將之儀、且兼長不可兼中將、何〔〕  
今月十九日法皇賜書禪閣曰、家成〔亮〕

忠雅卿息男〔亮〕外孫、任侍從之由、所申〔〕  
不可然故不許之、禪閣報奏曰、仰〔〕

卿去納言任帥并教宗任民〔亮〕  
帥不許、教宗所望曰、猶似去一官〔〕

任者明春可任歟、忠基申曰、教宗〔〕  
任帥者所望可足、法皇許之、昨〔〕

帥之狀〔今年秋滿、明春可補替、而忠〕  
〔忠基室八前隆女〕辭狀九

宇治新院云々、昨日自宇治給〔〕  
承了、案思給侍、少納言辭申〔〕

候、彼申請事也、只被成民部〔〕  
思給侍、明年罷成只同事侍〔〕

端書、  
家成者一旦令加申候許也、〔〕

昨日令申侍也、如反掌、尤輕々事也、後日  
侍了、可然者明年可相博師長卿歟、於（全）  
仰切了、（者九）

今日法皇召頭弁朝隆給師辭狀、又兼（原九）  
之由、手書給朝隆云々、

廿四日、戊申、（藤原美行）太相公使孫実長朝臣賀納言  
忠基等卿来賀同事、

廿五日、己酉、暁更人告曰、禪閣出御高陽院（院）

馳參、天曙參御前、仰曰、法皇聊有（院）

日出掃土御門、未刻許下名加任事奏（院）

之日、依有温氣不能自書、今夜高陽（院）

角念誦堂被行之、上達部直衣、殿上（院）

僧法服、兩度名謁如常、是四條太后例（院）

之外、上達部不參、僧侶參上之後、馳車（院）

(36) 惱事、答云、御咳無間、御鉢猶温、即參高陽（院）

謁禪閣、次掃高陽院、余・宗輔卿・成雅朝臣（院）

名謁了、率女房又兼長・隆長渡東三条、今（院）

卿・宰相師長卿、（下名上卿並雜）

廿六日、庚戌、深更參院、御惱無減云々、次參（院）

川御堂、（禪閣）猶坐、為違方也、

廿七日、辛亥、天晴、今日中納言中將兼長奏慶、  
三奏、辰刻余掃東三条、先是自院催賜（院）

御牛、（無御使、一昨日余奏）未一刻許兼長降自中門廊南

妻、立对南渡後橋南頭、（北）使前少納言俊通申余、俊通出

中門、昇自中門廊東簀子、申余（余在对東簀子）後、（南）降

自对南階、（不着）立兼長前（北面）、（宣）、（下力）兼長

□□□□

再拜、（初度一拜了起時）次使侍從師光申女房、其儀同上、但

師光降自中門廊西簀子欄絕所、（後通退入中門方）非無、（至兼長前南）

向而立、（也、失）次兼長出東四足參院、（白川）先（使）光隆朝臣（藤原）

院、于時猶御寢云々、次使俊盛朝臣申美福門院、次使同

朝臣申暉子内親王、次詣統子内親王家、（白）公保朝臣（藤原）

申、次禪閣、（御坐高陽院）使成隆朝臣申拜後、依召參御前、

次參高陽院、（土御門）使雅国朝臣申拜、被仰殿上如本之

由、復拜了着殿上、次參内、（近衛）入自南面東門、經床子

座前・陣座前等、立殿上巽階前、使行通朝（院）、（中御門）申拜、

了自本路退出、參新院、（東洞院）使資憲朝（院）

有召復拜、（以有召知）還拜（由拜無、於理雖有妨、先例）

(37) 參御前（是常法也、然猶不聽）參御前、次着（審）

鳥丸、（大炊御門）使師国朝臣（亮）申拜了、參御前（院）

取退下、賜師光、々々賜前駢、（竊返奉）賜（院）

立西对代南弘廂東面階前、（倉）入自西門（院）

俱再拜了、揖讓三度後、兼長（院）

後、兼長離列、讓主先昇着座、次兼長（院）

受之、次兼長自中門廊退出、向内裏、（三）光隆朝臣（院）

人降立東对南弘廂西面階前、答拜揖讓（院）

昇、兼長後昇、（近衛天皇）主人（宗）少將（兼）定取之、次牽出（院）

昇、兼長後昇、（兼）盛憲受之、次自中門廊退出、向（院）

自西門主人降立西对代東面階前、兼長（院）

立

人依疾跪居階下、昨日左馬權頭(源)定朝(源)臣、  
病不堪行步故、元三不

臨門不參拜、可謂無礼以無柔臨為幸者、予念三  
 者何有答拜、布袴若衣冠面詢何事之有乎、然門(源)臣

行、主人先昇、兼長後昇、主人命少將定房朝(源)臣  
 馬一匹、不經藏人之五位一、兼長降自本階、不著

一拜、兼長元服時(源)臣加冠、出自中門、此間着查、  
是以敬禮殊深、盛憲受(源)臣  
 座退入、不受拜、有隨身腰差、太、内内府無腰次誦禪子  
 内親王家、法性寺也、下、使雅賴申拜了、依召參入簾  
 中、次掃東三条、給祿於隨身、府生定番長、  
一定待所司取之、

(38) 於院御厩舍人・居飼・牛飼・牛飼各布五端、返奉  
 御馬・御牛、次給祿於車副、居飼各布三端、家司取之、  
各家司取之、太(源)臣以西对代  
 東面三個間為客亭、敷筵、無差母屋(源)臣

北一面奥方敷高麗帖一枚、為主座、二間端方敷高  
 麗帖一枚、其上敷龍鬢、其上敷東京錦茵、為客座、  
(又宅)右府同之、但不敷筵、不立屏風、客座無龍鬢、  
 菅円座、内府以東对南弘廂為客亭、不敷(源)臣  
 風、垂(源)臣、弘廂西一間敷菅円座、為主座、三間敷高麗  
 帖一枚、南北行、其上敷東京錦茵、為客座、

兼長裝束、々帯、打下襲、豎文表袴、薛繪螺鈿鈿、有  
 文帶、紫綾平緒、慶賀笏、檳榔毛車、兼長、帷裳、借内府  
(次行「理ノ下ニアリ」)

乘占幣、車副二人、兼長車副也、每寸嘗禪、理、口口口口部稱嘗、  
故也、車副二人、躡也、然而除大臣及大將之外、不稱之、至于  
者稱之、已為先例也、行列、  
 先居飼二人、一行、次番長秦國(源)臣  
中、持胡籥、黑移、鑄籥、次府生佐伯重文、同、次六位(源)臣

藤憲重(源)臣、藤憲忠、藤定隆、源有忠、已上余  
人二行、下政業、信範、敦任、盛、  
為先、

泰、(高階)盛憲、(藤原)皇后宮、(藤原)仲行、(藤原)經意、(藤原)賴業、(藤原)雅亮(源)臣  
為先、(高階)行家、(藤原)朝臣人頭、有成朝臣、(藤原)日向、有光(源)臣  
(藤原亮明)文草(源)臣、次車、(源)臣牛飼持頭、(源)臣次隨身近衛四人(源)臣  
狩袴、弓筋本家給之、至于府生、番長、連車、(源)臣上臈、(源)臣修理權大夫雅國朝臣、(源)臣右  
襖袴者用私物、隨身三人重服、召權三人、次、

(39) 后宮亮師國朝臣・同權亮成隆朝臣(源)臣  
 侍從師光、(源)臣散位信雅、兼長出時余於  
 問、民部卿來会、於同所見物、欲采出立、  
後、此門閣、頃之兼長參入、申慶、退出後(源)臣  
 減云々、良久退出東三条、秉燭後(源)臣  
 來、其後卿來申慶、雖他行(源)臣

臥内言談、次參議右大弁朝隆(源)臣  
 仰聞食由、朝隆再拜退出、(兼長、稱他行者(源)臣  
仰聞食者

廿八日、壬子、天晴、中納言中將補勾当、(兼長、中納言後補之、中納言召朝隆(源)臣  
顯憲朝臣子、朝臣仰之、(藤原)藤憲、(藤原)故皇后宮亮  
高階秦宗、仲行未刻許【兼長直衣、(源)臣紫豎文織物、(源)臣指貫、紅打(源)臣】

把笏、帶野鏡(小)、乘檳榔參新院、(源)臣  
不參、院、次退出、前駝六人、(源)臣衣冠、(源)臣源隆親(源)臣  
雅亮、四人、(源)臣布衣、帶鏡、垂(源)臣頭右中弁光頼朝臣申慶、  
(源)臣

今日有庁覽内文、上公能、宰相(源)臣  
 侍不候、上卿進射場奏内(源)臣  
 司等官符請印云々、成隆(源)臣  
 今案、宇佐大官司・太神宮(源)臣  
 任省解付官之後、作内(源)臣

此兩府官不可官之後、  
(源)臣

之、可候横刺也、而至于宇<sup>〔</sup>

(40)然、太神宮文於庁覽之云々、失□□

之外、無内印符、於庁可覽何文乎、余答曰、任例令作

季祿官符、於庁覽之宜歟、成隆雌伏、今朝使俊憲<sup>〔藤原〕</sup>

奏院曰、兼長為元日立拜礼、将年中聽還昇、入夜院

藏人敦佐<sup>〔藤原〕</sup>来曰、中納言還昇者、

廿九日、<sup>〔突〕</sup>依御惱未平、不可渡御高松之由、俊憲告送、酉

判与兼長束带同車、<sup>〔藤原〕</sup>參院路同廻案、兼長院別

当也、或曰、别当・判官代雖昇進不去之、問院司等、所答不

詳、此事具<sup>〔藤原〕</sup>行成記之由、側所覽也、即遣取件記引勸

之処、長保三年八月廿五日任參議、九月六日如本為女院<sup>〔東三条院藤原隆子〕</sup>

别当啓慶云々、即欲如本補别当之由、使俊憲奏之、婦

来曰、院・美福門院别当如本、次兼長奏慶於院、判官

代範家<sup>〔藤原〕</sup>常・伝奏、次着殿上、次啓慶於美福門院、判官

代範兼衣<sup>〔藤原〕</sup>、伝啓、次着殿上、次伴兼長參高陽院、謁禪

閣、此間兼長參内、頃之余婦東三条、頭弁光頼申古書、

<sup>於客亭見之、家司致任先進申、頭弁</sup>次兼長婦来<sup>〔藤原〕</sup>曰、聽

還昇、<sup>朝臣候由、須中右中弁朝臣</sup>即奏慶、<sup>範家</sup>了着殿上之後、所出也、勸

学院学生来、奉見參、依例給祿物、隆長依追讎參

内、追讎上經定<sup>〔宗〕</sup>・宰相雅通云々、有小除目、免内覽、

今朝「隆」院藏人<sup>〔符〕</sup>以政内覽月奏之次、請賜判、仰

曰、判者判官代可請也、汝何請之哉、以政曰、近日六位判

官代皆有障、仍藏人請之也、仰曰、若然須先来請判

之<sup>〔宗〕</sup>定後、更来内覽也、而内覽之次請判、理不可然、但過二

(41)日者何日奏乎、仍加判返給了、依例遣覽敏於冷泉、

供養妙經、<sup>〔荷前〕</sup>代、為知奉公淺深、<sup>〔兼長〕</sup>統載兩長上日、以備後

鑑、兼長上日

九月小

九月小

十七日慶申<sup>〔參議〕</sup>

十月大

一日着陣

四日參内

七日參内

十日參内

十四日參内

十八日春季御読経初

廿一日季御読経竟

廿四日大乘会初

廿七日着座

十一月小

一日政

四日參内

八日參内

十一日參内

十五日大原野祭上卿

十九日節会

廿二日臨時除目

廿五日同還立

十二月大

一日參内

五日參内

廿日參内

廿一日參内

廿二日參内

廿三日參内

廿四日參内

廿五日參内

廿六日同第二日

廿七日參内

廿八日參内

廿九日參内

三十日參内

三十一日參内

十二月參内

一月參内

二月參内

三月參内

四月參内

五月參内

六月參内

七月參内

八月參内

九月參内

十月參内

十一月參内

十二月參内

廿一日齋宮御禊前駐<sup>〔藤原〕</sup>

廿二日參内

廿三日參内

廿四日參内

廿五日參内

廿六日參内

廿七日參内

廿八日參内

廿九日參内

三十日參内

三十一日參内

十二月參内

一月參内

二月參内

三月參内

四月參内

五月參内

六月參内

七月參内

八月參内

九月參内

十月參内

十一月參内

十二月參内

	廿一日参内	廿二日荷前定	廿四日参内
	廿五日参内		
閏十二月小	三 日参内	四 日参内	五 日参内
	六 日秋季御読経定	七 日参内	八 日参内
	九 日参内	十日仁王会	十一日参内
	十二日荷前使	十三日秋季御読経初	十三日参内
	十五日参内	十六日季御読経竟	十九日最勝寺灌頂并御仏名
	廿一日参内	廿二日除目初	廿三日同入眼
	廿七日申慶 <small>中納言</small>	廿九日慶申 <small>還昇</small>	
九月小	師長上日	廿 日皇 <small>同</small> 宮行啓	廿九日東寺国忌
十八日慶申 <small>從二位</small>			
十月大	一 日着陣	三 日参内	五 日参内
	十八日春季御読経初	廿二日同竟	廿四日大乘会初
	廿五日同第二日	廿八日同竟	
十一月小	一 日兼長着座	廿九日 <small>千九日</small> 節会 <small>節会</small>	廿 日女王祿
	廿三日吉田祭上 <small>卿</small>	廿四日 <small>廿四日</small> 臨 <small>時力</small> 祭 <small>祭</small>	廿九日参内
(43)十二月大	一 日参内	日公卿分配力	
閏十二月小			
十日仁王会	十日荷前使力	廿三日秋季御読経初力	
十六日同竟 <small>秋季御読経</small>	十九日 <small>御仏名力</small>	廿二日除目初力	